

# 三岸節子 色彩のきらめき

「色彩画家」と呼ばれる三岸節子が、豊かな色彩感覚をいかに発揮した代表作を紹介します。色彩あふれる室内画や、情熱的に一つの色彩を追求した作品などをモチーフごとに展示し、その様々な展開をご覧ください。

## 室内画

節子が画業初期に多く描いた室内画では、鮮やかな色彩感覚を見ることができます。《花・果実》(No. 2)では、黄色のテーブルに載った赤いりんご、深緑の布というように、濃厚な色使いがされています。《室内》(No. 5)では、中央の絨毯や背景に赤、青、緑といった鮮やかな原色がふんだんに用いられるほか、室内空間を絨毯によって真ん中で遮る画面構成がとられ、装飾的かつ工夫を凝らした作品となっています。この色彩の豊かさは、節子が憧れたフランスのマティスやボナールの色鮮やかな絵画に由来します。また、このような色彩豊かな作品だけではなく、《静物》(No. 7)のように画面全体を茶色や赤、黄色などの暖色で統一した作品も制作されています。



《室内》 1939年 ©MIGISHI

## 馬モチーフ

1935(昭和10)年ごろには、節子はしばしば馬を作品中に描いており、この頃とくに好んだモチーフであったことがうかがえます。《月夜の縞馬》(No. 3)では、暗い色調の青や、灰色が用いられたモノクロの画面の中で、月を見上げる2頭のシマウマとぼんやりとした人々の姿が描かれます。節子には珍しい冷たい印象の作品ですが、節子はこれと同様の構図の絵を、1935(昭和10)年出版の伊藤整翻訳『チャタレイ夫人の恋人』の表紙絵や、1936(昭和11)年開催の第1回七彩会展、第6回独立展に出品した2点に描いています。それに対して、《群がる馬》(No. 4)では、馬たちが白、朱、茶色の様々な姿で描かれ、カラフルで暖かい空間が描き出されています。

## 鳥モチーフ

1960(昭和35)年頃、節子は軽井沢山荘で鳥をモチーフに連作(No.10, 11)を手がけています。この2点では、赤を基調に勢いよく飛ぶ鳥と、青を基調に静かに横たわる鳥が描かれますが、赤と青の色彩対比によって、激しさと静かさという対称的な印象を際立たせています。1960年代、節子は「私は色彩の画家ですから、色彩が未完の過程においても死活を握っております。」(注1)と語っており、節子の絵画制作において色彩が重要な位置を占めていました。《ブルゴーニュにて》(No.17)では、鳥たちが黄色の花畑の上をにぎやかに飛んでいます。画面右端には一羽の翼が覗き、画面の外にも多くの鳥が集まっていることが想像されます。薄ら白い空を暗い雲が覆い、空の明暗の対比、そしてモノクロの空と鮮やかな花畑の対比という2種類の色彩の対比がなされます。



《火の山にて飛ぶ鳥(軽井沢山荘にて)》  
1960年 ©MIGISHI

## 連作における色彩と瓶モチーフ

他の連作にも色彩の対比は見られます。《雲と海の対話》シリーズ(No.14, 15)では、青や白、黒を用いて迫りくる激しい嵐を、黄、橙、赤を用いて夕焼の風景を描いています。節子は空の変わりゆく色彩を好んでいたようで、「風景の美しいのは、明け方か夕暮れのいつときのことである。(中略)やがて空は輝きはじめ、雲たちの描く色彩の饗宴が始まる。それまでのホンの一瞬の過ぎゆく時だけに風景への期待がこもる。」(注2)と語ります。この連作では他に雷、春、冬をテーマにした3点が制作されています。

壺と瓶をモチーフとした3点の連作(No.19~21)は、1992(平成4)年に開催された「三岸好太郎と三岸節子展」のために新たに制作された作品です。並んだ瓶や壺はどこか人間のようにも見える面白さがあります。用いられている色彩は《作品I》(No.19)では淡い灰色やピンク、《作品II》(No.20)では一転して鮮やかな緑色や青、《作品III》(No.21)では茶色と黒というように3点で異なっています。モチーフは共通ですが、色彩を変化させることで異なる雰囲気作品に仕上げられています。



《作品II》 1991年 ©MIGISHI

(注1)(注2)ともに三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年